



Title	Be Going To考 : 現在と未来の間
Author(s)	沖田, 知子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1982, 15, p. 5-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Be Going To 考

——現在と未来の間——

沖 田 知 子

1. はじめに

時の流れは、過去・現在・未来に三分して考えるのが、一般的な傾向であろう。しかし、その時 (Time) に対応すべき時制 (Tense) を考えると、必ずしも一致するとは言い難い場合がある。たとえば英語について、Jespersen⁽¹⁾ (1931) は次のような疑問を投げかけている。

- 1) Has English a future tense in the same sense as, say,
Latin or French has one ?

動詞の活用形そのものに未来形をもつラテン語やフランス語とは異なり、英語では、直接的に未来を表わす形式というものをもたないのに、果たして「未来時制がある」といえるのだろうかと問題提起している。実際、英語では、種々の未来を表わす表現はあるものの、皆それは迂言的な用法 (periphrastic uses) である。その主なものとして、たとえば次のようなものが考えられる。⁽²⁾

- 2) (a) *Will / shall* + Infinitive : The parcel will arrive
tomorrow.

- (b) *Be going to* + Infinitive : The parcel is going to arrive
tomorrow.

- (c) Present Progressive : The parcel is arriving tomorrow.

(d) Simple Present : The parcel arrives tomorrow.

(e) *Will / shall* + Progressive Infinitive : The parcel
will be arriving tomorrow.

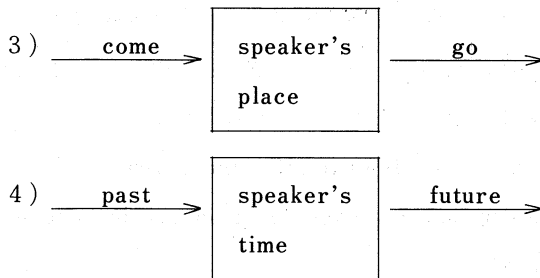
助動詞 *will / shall* を使う (a) (e) と区別して、他のものは、時制は現在形でしかも未来を表わすということから futurate sentences と分類される場合がある。⁽³⁾ の中では、未来を表わす副詞相当語句 (future time adverbials) を伴うものが多いが、*be going to* や進行形では、その種のものがなくとも未来を表わすことができる。

さて、このような未来を表わす表現の中で、日常頻繁に使われるものに *be going to* がある。*Be going to* は、その語形からもわかるように、運動動詞 (verbs of movement) *go* の進行形から発達したと考えられる。しかし、その本来の意味は弱まり、単なる時制標識 (tense marker) として、Jespersen の言う “an empty grammatical word” という性格を増じていったのは、たとえば、*I am going to go* 等といった表現があることから⁽⁴⁾ 推察される。このようなことから、*be going to* を一種の独立した表現形式として、Palmer のように擬似助動詞 (Quasi-auxiliaries)⁽⁵⁾ の範疇に入れて考えることも多い。

これから、*be going to* について、これが一体どのような意味と用法をもつのか、適宜、他の未来を表わす表現——特に進行形と *will / shall*——と比較しながら考えてみたい。本論に入る前に一つ注意しておかなければならない点は、助動詞 *will / shall* である。*Will / shall* には、法の助動詞 (Modal auxiliaries) と、未来を表わす助動詞の二種の機能があると考えられるが、ここでとり扱うのは、後者で、いわゆる未来を表わす表現の中でも “pure prediction” に近い用法に限ることにする。

2. 現在との接点——進行形と共に

Be going to が *go* の進行形から発達したことはすでにみたが、まず *go* について少し考えてみたい。空間的に、*come* が話者の所へ行く運動を前提とするのに対し、*go* は話者から離れて行く運動を前提とする。Givón⁽⁶⁾ (1973) が主張するように、3) の空間的図表は、4) のような時間的図表に対応させられるであろう。



4) の示すように、過去は話者の時間（発話時点⁽⁷⁾）に向い、未来はそこから遠ざかるということは、直観的にも正しいといえよう。つまりこのことは、3) のような *come* と *go* のもつ前提関係を残して、軸を空間から時間に移行させたものが 4) であると考えられる。3) 4) は、各々空間と時間の二軸で与えられる二次元座標に相当すると考えられる。このことは、*go* が抽象的な時制標識として、未来を表わす手段に使われる一つの有力な証拠となろう。

Palmer (1974)⁽⁸⁾ は、音声的な特徴の指摘をしている。

5) *I am going to do that.*

(i) [aim gənə du: ðæt]⁽⁹⁾

(ii) [aig ɪ du: ðæt]

6) *I am going to London.*

*[aig ɪ lʌndən]

6) のような本動詞の進行形の場合、弱形にならないのに対し、5) の *be going to* の場合、弱形も可能となる。このことは、*be going to* の擬似助

動詞としての性格を示すことに他ならない。

進行形による未来表現は、あらかじめとり決められた予定を表わす。

7) *She is leaving tomorrow.*

進行形による未来表現は、発話時点より以前に決定した計画に基いたものとなる。従って、その決定した後の発話時点では、その決定が意志に基いたものであったにせよ、その主観的色彩は風化し、かなり客観的なものになってしまう。逆に言えば、動作に力点をおく進行形の機能から、過去の意志の有無より未来の動作（予定）の方に力点がおかれる。

8) *He is giving you a very liberal allowance, almost, for a girl who has never had any experience in taking care of money, too liberal.* —DLL

9) *'Good morning, old sport. You're having lunch with me to-day and I thought we'd ride up together.'* —GG

たとえば、8)の文主語は当初奨学金を出すと決意したはずだが、8)の文の発話時点では、一種の了解事項となってしまう。また9)でも昼食を一緒にするという予定を、スケジュール表を読み上げるような気持で述べて、相手にも有無を言わさない。

ところで進行形の原理として、van der Laan は、その中心に「直接観察 (Direct Observation)」⁽¹⁰⁾ ということを主張している。「吾々があることに興味を持つごとに、つまりあるものが吾々の注意を喚起するごとに、吾々の知覚は変じて意識的観察となる」、これは、感情移入 (empathy)⁽¹¹⁾ の表現ということに通じる。その際二種の話者の命題態度——主観的態度と客観的態度——ということが考えられる。いうならば、評論家とニュースアナウンサーの態度である。

さて、進行形に二種の意味があるのと平行して、*be going to* にも二種の意味があると考えられる。つまり、*be going to* は、現在の要因——主

観的または客観的——に基いて未来を語ることとなる。これは、丁度 Leech⁽¹²⁾ (1971) 等が主張している二用法に相当すると考えられる。それらは、次の様にまとめることができる。

10) 現在の要因の未来での実現⁽¹³⁾

- { a) 現在の意志の具現予想
- { b) 現在の徴候判断の具現予想

つまり、現在の要因として、主観的な決意、客観的な徴候判断の二種があり、それが未来で実現されるという予想を表わす。少し極端な言い方をすれば、前者は 11) のように〈今にみておれ〉、後者は 12) のように〈この分では〉といった言外の気持ちが含まれる場合である。

11) I am going to be a millionaire.

12) She is going to have a baby.

徴候判断の最も顕著な例は、13) のような天気の場合であろう。

13) You should see the sky ! There's the queerest orange-coloured light over everything. We're going to have a storm.

—DLL

これは、嵐の徴候を前にして天候の変化を予想したものとなっている。しかしながら、現在その要因があるとしても、極端な場合、実現されない場合もありうる。たとえば、*be going to* が過去形で使われた場合、次のように、

14) 'Well, if business was good, I was going to ask for a rise this Christmas, but, as you know, it's not been good.'

—AP

昇給を要求するつもりだったのに、景気が悪くて果たせなかったということが起り得る。実現していれば、そもそも意志があったのか問題にする必要がなく、その事実を報告するだけで十分である。このように *be going*

to により意志の存在を主張する用法は、進行形による未来表現が、むしろ意志とは切り離された手はずとして用いられる場合と対照的である。勿論、この決意と手はずの違いというものは、例文によりかなり重要度が異なるが、次のような場合、その違いは決定的となる。

15) I'm going to take Mary out for dinner this evening.

16) I'm taking Mary out for dinner this evening. (Leech)

何かの誘いをうけて断わる場合の返答として考えてみると、15)の *be going to* では、現在そうする意志があるということを含意し、相手の感情を害することも考えられる。一方、16)では、前にふれた進行形の用法で、発話時の意志には触れずに、一種の機械的操作でスケジュールを盾にして断わっている。これが無作為的に断わる口実型として有効なのは、すでに決まってしまうことをもち出すことにより、現在の自分の気持ちがどうなのかをぼかしてしまっている所に、進行形による表現のうま味があると考えられる。つまり、未来を表わす進行形では、未来の出来事は話者の心中ですでに決まっている (predetermined) であるのに対し、*be going to* では想定されている (assumed) にすぎない、この違いをうまく使いわ(14)けている。進行形にも話者の意志を表わす場合もあるが、それと現在時点との関わりが、*be going to* のように直接的ではないために、意志を明示する時にはやはり *be going to* を用いる。

17) When are you getting married ?

18) When are you going to get married ?

結婚の日取りを尋ねる場合でも、17)では単に決まっている日取りの情報を要求しているのに対し、18)では「一体いつにするつもりだ」と相手の意図を問うた形となる。

Dowty (1977) は、未来を表わす進行形について、次のような主張をし(15)ている。

- 19) Thus there seems to be no objection to treating futurate progressives — with or without future adverbials — as ‘imperfective’ progressives of tenseless futures.

進行形の意味の一つである「未完了」を、未来表現にも拡大して考えている。未完了ということは、裏返せば、話者の気持の上ではすでに始まっている、決まっているということで、そのいみではかなり確実性の高いものと考えられる。それに対し、*be going to* は現在要因があるというだけで、それ程用意周到とはいかない。進行形の未来表現は、未来における予定ということを *be going to* よりは少し長く客観視しているということで、確実性が高くなると考えられる。一方、*be going to* は、主観的な未来表現としても使われるということが、進行形と分岐を成す一因と考えられる。

結局、進行形による未来表現では、発話時より以前にした決心やたてた計画にのっとることになることを示す。つまり、あらかじめ決めた事は、すでに一人歩きすることになり、発話時点では、その事実のみが残って、それを決定した時の意志が存続しているか否かは捨象される場合が多い。そこが、発話している現在そういう意志をもっていることを示す *be going to* と違うところである。従って、現在の意志を明示強調する場合には *be going to* が使われる。極端な場合、〈もう決まってしまったことだから、今更仕方ない〉という気持ちを進行形がもちうることは、すでに16)の例でみた通りである。

(16)
毛利 (1972) は、現在の要因のうち決意は徴候判断の応用であると指摘している。つまり他人が徴候で判断して言いうる状態に自らなってみせるという解釈に基いたものだが、これは共起する文主語や動詞の種類との関連からも興味深い。決意の場合、意志能力をもつ人物主語、決意して初めて事を起こすことのできる行為動詞に限定されるが、徴候判断の場合、そのような制限はない。従って、

20) He is going to arrive late at the concert. (Leech)⁽¹⁷⁾

20) の文のあいまいさ — わざと遅れるつもりなのか、この分だと遅れそうなのか — もこの点に由来すると考えられる。

3. 未来との接点 — *will / shall* と共に

Be going to と未来を表わす助動詞 *will / shall* について考えてみたい。*Will / shall* には、その根本的意義である意志・義務を表わす法の助動詞としての用法があるが、ここでは扱わない。

さて、*be going to* が、現在の要因（主観的な意志または客観的な徴候）に準拠して未来についてのべることはすでにみた通りである。つまり、現在に立脚し、その時点では〈そのまま行けば〉そうなるであろうという見通しに立っていることに他ならない。〈そのまま行けば〉ということは、現状（つまり意志または徴候）を維持して行くといきつく、異常事態でも起こらない限り変更はないということを意味する。従って、*be going to* は現在に位置付けられている（*present orientated*）といえよう。つまり、未来の出来事そのものよりは、むしろその始点となる現在の状態の方により力点があると考えられる。

一方、そういった力点がない場合、つまり未来の出来事に関心が向けられている場合（*future orientated*）に、*will / shall* が使われる。単なる予言（*prediction*）の場合と考えられる。従って、現在に基く *be going to* と比べ、*will / shall* の発想はかなり自由なものの、それに反比例して確実性は劣ることとなる。

⁽¹⁸⁾
Wekker (1976) は、次のようなテレビの天気予報を採録し、興味深い提言をしている。

21) Finally, tonight on to the weather forecast for the South.

The night's *going to* be rather cloudy, but most places *will*

remain dry. The temperature *will* fall around 4°C. near the coast,... (Nationwide, BBC, 20/2/75)

ここでは、まず予報を現在の徴候（雲が出て来た）から始め、次にその視点を未来に転じて予報する際、*be going to* と *will* をうまく使いわけている。この視点の転換（shift of perspective）が可能となるのは、*be going to*, *will/shall* の指向性が現在、未来と異なるためだと考えられよう。つまり、Palmer (1979)⁽¹⁹⁾ が指摘したように、*be going to* で現在から未来への視点を設定し、設定後は *will/shall* で未来についてのべると考えられる。

22) "I'm going to get out of here," he said. "I don't know where I shall go or what I shall do but I am going away." —WO
22) は母とけんかした少年の言葉だが、今はっきりしていることは、家を出ていくということだけで、それから後のことは野となれ山となれというように、うまく *be going to* と *shall* との使い分けをしている。

23) It will be unusually good, for we're going to make it with real cream and three butter balls. —DLL
23) はお菓子を作る際に、材料は充分準備していても、その出来栄は想像の域を出ないことがわかる。22) 23) 共に、現在の状態 [22) は意志, 23) は徴候判断] からの未来の判断は *be going to*, その未来の後のことは *will/shall* でと、はっきり使いわけている。従って、*be going to* で示された未来の出来事が実現されて初めて、*will/shall* で示された未来の出来事の実現の可能性が生じることとなり、*be going to* の方が確実であるということを示す。

さて、確実性ということとは、裏返せば、実現するかしないか不明 (contingent) であるということにも通じる。全く偶発的なものと、あらかじめ大方の予想はついているものと言えよう。少なくとも話者の気持の上では、

be going to は現実のもの (actuality) として把握されている。それは、現在の要因が存在しているからであり、言うならば、話者の心中ではすでに始まり未来の方へ向っているためであろう。McIntosh (1966)⁽²⁰⁾ は、*will / shall* が contingent であるのに対し、*be going to* は absolute であるとする主張しているのも、現在に証拠があり、そこに力点がおかれるためと考えられる。更に McIntosh は、contingent/absolute に関し次のように言う。

- 24) Other things being equal, the C/A distinction seems to have as its exponents the *will/be going to* tense-types. Without presenting any qualifications to this for the moment, we may say that statements using the G-construction carry no reservations arising out of contingent circumstances : He's going to cry.

つまり absolute な *be going to* は、無制限に contingent な状況から文を作ることができるのに対し、contingent な *will / shall* では何らかの条件が必要となる。つまり、contingent な状況が実現するための何らかの条件が *will / shall* では必要となってくる。言い換えると、contingent な文が真理値をもつためには、その可能世界 (possible worlds) を限定するための条件が必要となる。

- 25) He'll cry.

- 26) He'll cry if you don't give him the sweet.

25) ではたとえば文尾に *someday* を付けたり、26) のような条件節で限定することにより、25) のような文に真理値を与えない限り、それだけでは何かもの足りなく感じられる。Binnick が指摘している *will / shall* の省略的 (elliptical) なところもそこに帰因すると考えられる。一方、*be going to* はその absolute な機能により、つまり発話時点にすでに証拠が

あり、それに基いた見通しがあるということから、それだけで、たとえば 24) の例文のように意味をもちうる。

次に、もう少し条件節との共起について考えてみたい。*Will / shall* の条件は、仮説的 (hypothetical) なものであるが、actual な機能をもつ *be going to* ではそのような条件は要らない。つまり、*be going to* では現在すでにそれをひきおこす要因が存在しているということは、すでに実現のための最低限の条件はみたされていることに他ならない。それが後になって実現されるかされないかは、これとは全く別の問題である。従って、一般に *be going to* は、27) のように条件節とは共起しなとは言えよう。

27) *If you leave now, you are never going to regret it.

(22)
(小谷)

ところが実際には、次のような共起例も多い。

28) We're going to find ourselves in difficulty if we carry on
like this. (Leech)

29) Sallie is running for class president, and unless all signs
fail, she is going to be elected. —DLL

28) では〈このまま行くと〉という現状維持、29) は〈現在の手応えが間違いないければ〉という現状確認とでもいうべきもので、いずれも現在の付帯状況の確認または明示であり、特別な if P then Q というような論理関係とは言えない。従って、このような節が明示されていなくとも十分文意は伝達される。つまり、*be going to* の現在指向の機能のため、それだけで未来に対する現在の態度表明が可能となる。一方、*will / shall* は未来指向で現在とは一応遊離しているため、単独ではどうしても省略的となってしまう。遊離しないために、たとえば因果関係などを含む論理関係の明示が要る。

30) Don't sit on the rock. It'll fall. (=It will fall if you sit

on it.)

- 31) Don't sit on the rock. It's going to fall. (=It is going to fall anyway, whether you sit on it or not.)

Palmer (1974)⁽²³⁾ は、上の二文に括弧内のような解釈をそれぞれ与えている。

30) では、命令文を文脈的に先立つ条件に援用することにより、省略を補って一つの解釈を構成している。一方、31) の *be going to* では、前の命令文とは独立してそれ自体で近接未来表現となっている。30) のように論理関係が明示されていない場合にも、*will / shall* の解釈には、何らかの潜在的条件 (implicit condition) が必要だと考えられる。

Close (1970)⁽²⁴⁾ は、*be going to* がその構造内で、現在の要因と未来の出来事を別々に述べると主張している。

32) *Present indication* *Future event*

1. situation : black cloud (P) rainfall (F⁽²⁵⁾)

It's going *to rain*

2. situation : myself in old digging in the garden (F^u)
clothes (P)

I'm going *to be digging the garden*

つまり、*be going to* は〈P+F〉として機能すると考えると、Fのみの *will / shall* のように単独で使われた時に省略的になるようなことにはならないということも説明できる。*Will / shall* では、Fが有効となるために何らかの付帯条件が何らかの形で必要となる。

また、このP、Fが非常に接近している時、いわゆる近接未来 (Immediate Future) を示す。それは、現在の要因が未来の出来事をひきおこす必然性が、その時間的な逼迫性により強調されるため、いわば意識の上では〈もう始まっていて避けようもない〉場合をさすこととなる。*Be going to* では、たとえば35) のように特別に切迫感を表わさない時の副詞相当語句が

ない限り、33) 34) のように近接未来の読みが多いのもこのためであろう。

33) I'm going to faint.

34) The ten o'clock bell is going to ring in two minutes.

—DLL

35) I'm going to be a doctor when I grow up.

4. *Be going to* の用法

Be going to の注意すべき用法に少しふれておきたい。

まず、*be going to* が条件節の中で使われた場合を考えてみたい。

36) Well, perhaps I should choose a London map, if I'm going to look at Clapham. (Palmer)

37) If you're going to be a lady you'll have to stop feeling neglected if the men you know don't spend half their time snivelling over you and the other half giving you black eyes.

—MFL

この場合、条件節の出来事は、帰結節の出来事の後に続くこととなり、その逆は成立しない。たとえば36)では、帰結節の〈Londonの地図をみる〉ことではじめて、条件節の〈Claphamを捜す〉ということが可能になるという時間的序列となる。これは、38)のように条件節で単純現在が使われた場合、条件節の後に帰結節が成立するという時間的序列と対比をなす。

38) If you work hard, you will succeed.

Be going to の主観的な意志が、客観的な徴候判断の応用とも考えられることは、前にもふれたが、この主観的態度が強調された場合を次に考えてみたい。岡田⁽²⁶⁾(1967)は、「話者の『感情の動き』につれて客観性が後退し、主観が前面に押し出された例」と説明している。

39) The Christmas holidays begin next week and the trunks are up. The corridors are so filled up that you can hardly get through, and everybody is so bubbling over with excitement that studying is getting left out. I'm going to have a beautiful time in vacation. —DLL

40) I sat down on the edge of a big upholstered chair and kept saying to myself :

'I'm going to see Daddy-Long-Legs ! I'm going to see Daddy-Long-Legs.' —DLL

初めてのクリスマス休暇を前にして期待に胸ふくらましている39)、40)ではやっと念願になって足長おじさんに会える胸のときめきという強い感情的色彩をもった表現となっている。客観的には〈楽しい休暇を過ごす〉、〈足長おじさんに会う〉という状態に今からなるんだ、なってみせるんだという強い主観的態度が強調されていると言えよう。

41) Are you going to behave like a lady or not ?

42) When the hell are you going to grow up ? (岡田)

41) 42) 共に、*will / shall* では表わしえない話者の相手への気持を反映させた主観的表現となっている。たとえば42)のように〈いつまでもわからないことを言う〉という要因を前にして、いらいらした気持で〈一体いつになったら大人になるんだ〉と相手の意図を問いただしている。これは、感情的色彩を多分にもつ進行形が未来を表わす時には、その主観的要素はかなり捨象されるため、未来表現で意志や強い感情を表わすのには、*be going to* が使われるからと考えられる。41) 42) 共に、現在の要因に対する話者の気持が反映されることにより、一層 *actuality* が強調された例であるといえよう。

43) I'm going to punish them. (Leech)

(27)
Leech は、(43) の例は単なるおどしではなく、実行する意志も力もあると主張している。これも、*actuality* に根ざす話者の気持が反映しているためと考えられる。

44) He's not going to cheat me.

45) You're going to do as I tell you.

44) 45) 共に、話者の意志を強調している。

5. おわりに

Be going to について、適宜進行形による未来表現や *will / shall* と比較しつつ考えてきた。*Be going to* は未来についてのべる表現の一つであるが、同時に未来に対する予想の根拠となるべき現在の要因をもつという点では現在指向的である。そしてそれは、単なる予想を示す *will / shall* の未来指向性と対照的である。このような *be going to* と *will / shall* の前提の違いは、統語的環境にも反映されている。

さて実際の *be going to* の意味は、進行形と同様、客観的、主観的という二側面をもつ。それは、現在の要因に対する客観的徴候判断、主観的な意志の二種である。進行形による未来表現がむしろ主観的要素を捨象した表現になるのに対し、その主観的色彩を *be going to* がにう場合が多い。

このように考えてゆくと、*be going to* の根本原理といえば、それは〈方向性〉であると考えられるであろう。P, F という二点をつなぐベクトルを考えればわかりやすいかもしれない。現在と未来をつなぐ矢印つまり方向性をもつということは、まず現在の要因に基いた上で更に未来を志向することであり、多くの場合、話者の心中では、その進行方向に心がはやって向いている。極端な例では、すでに始まり進行しかけていると考えられる。だからこそ、心変りといった余程のことがおこらない限り変更はありえないということから、確実性の高いものとなる。その端的な例が、P,

Fが接近している近接未来であり、不可避的 (inevitable) な場合——たとえば46)——をもさす。

46) Watch it ! That pile of boxes is going to fall. (Leech)

このような方向性に基いて、*be going to* は、未来表現としてよく使われる。しかし、口語表現では、この方向性ということが重用される余り、それが単なる未来の時制標識として使われている場合が多いことを注意しなければならない。

英語の未来表現の一種である *be going to* について考えてきたが、強調しておかなければならないのは、未来を考える際には、それに対する話者の蓋然性 (probability) の査定を含むいわゆる法 (modality) の問題との接点を見逃すことができない点である。はからずも、ここでは考えなかった *will / shall* のもう一つの意味は、意志や義務を表わす modal なものであった。実際それは発生的にも *will / shall* の原義としての色彩を拭いきれない場合が多い。つまり、未来というのは、通時的に過去・現在・未来と並べただけでは測り知れない不透明な世界である。そして結局、初めに提出した Jespersen の提議へと戻ることとなる。

少なくとも多くの未来表現の中にあつて、*be going to* は、現在と未来のかけ橋としての機能をになうものと考えられる。多くの問題を残したままであるが、それはこれからの研究の課題としたい。

注

- (1) Otto JESPERSEN, *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV, George Allen & Unwin, 1931, p.291.
- (2) Geoffrey N. LEECH, *Meaning and the English Verb*, Longman, 1971, p.51.
- (3) Fred GOODMAN, "On the Semantics of Futurate Sentences," *Working Papers in Linguistics*, no. 16, 1973, p.76参照。これは元来 Prince

が1973年の口頭発表の際に使用した用語である。

- (4) JESPERSEN, *op. cit.*, p.217. 例文のような場合, *be going to* は音声的には弱形をとる。
- (5) F. R. PALMER, *The English Verb*, Longman, 1974, pp.163—164.
- (6) Talmy GIVÓN, "Time-Axis Phenomenon," *Language*, vol. 49, no. 4, 1973, p.918.
- (7) 厳密な一点というよりは, ある程度の幅 (interval) をもっていると考ええる事が多い。
- (8) PALMER, *ibid.*
- (9) (i)は弱形であるが, [ai m gouɪŋ tə du: ðæt] と(ii)の中間段階と考えられる。
- (10) J. van der LAAN, 『動詞進行形の研究』. 斉藤静(訳). 篠崎書林, 1953, p.20.
- (11) 長谷川存古, 「Jane Austen の進行形 —— *Mansfield Park* を中心に」, 『関西大学英文学論集』, 20号, 1980, p.177参照。
- (12) LEECH, *op. cit.*, p.54.
- (13) 「現在」は, present より current として捉えるべきだ, と PALMER (1979) は主張している。
- (14) Martin JOOS, *The English Verb—Form and Meanings—*, University of Wisconsin Press, 1968, p.22.
- (15) David DOWTY, "Toward a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English 'Imperfective' Progressive," *Linguistics and Philosophy*, vol. 1, no.1, 1977, p.72.
- (16) 毛利可信, 『意味論から見た英文法』, 大修館書店, 1972, p.179.
- (17) LEECH, *op. cit.*, pp.54—56.
- (18) H. Chr. WEKKER, *The Expression of Future Time in Contemporary British English*, North-Holland, 1976, p.125.
- (19) F. R. PALMER, *Modality and the English Modals*, Longman, 1979, p.123.
- (20) Angus McINTOSH, "Predicative Statements," in Bazell, Catford, Halliday & Robins (eds.), *In Memory of J. R. Firth*, Longman, 1966, p.306.
- (21) Robert I. BINNICK, "Will and Be Going To," *CLS*, vol. 7, 1971,

- pp.40—52. —, “*Will and Be Going To II*,” *CLS*, vol.8, 1972, pp.3—9.
- (22) KODANI Shinichiro, “A Study of the Future Progressive,” 『京都工芸繊維大学繊維学部学術報告』, 9 卷, 1981, p.459.
- (23) PALMER (1974), *op. cit.*, p.164.
- (24) R. A. CLOSE, “Problems of the Future Tense (1),” *English Language Teaching*, vol. 24, no.3, 1970, p.230.
- (25) F^o は *will*, F^u は *will + progressive* をさす。
- (26) 岡田尚, 「Be going to の一つのもち味」, 『英語青年』, 1967年11月号, p.731.
- (27) LEECH, *op. cit.*, p.55.
- (28) DOWTY (1977) は, 線状の過去に対し, 未来は色々な可能性をもちうるということから未来を枝分れとして捉える。すなわち, branching-futures model である。

DLL	Jean WEBSTER, <i>Daddy-Long-Legs</i>
GG	F. Scott FITZGERALD, <i>Great Gatsby</i>
AP	J. B. PRIESTLEY, <i>Angel Pavement</i>
WO	Sherwood ANDERSON, <i>Winesburg, Ohio</i>
MFL	Alan Jay LERNER, <i>My Fair Lady</i>

(文学部助手)